

## 「生物多様性保全活動」にみるレジャー論的課題

田中伸彦 [東海大学観光学部]

キーワード：生物多様性保全 レジャー論 生活時間 仕事と稼ぎ

### 1. はじめに

2010年は10月に生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)が名古屋で開催されたことなどをを受けて、わが国でも生物多様性保全活動の重要性が、市民に認識されつつある。生物多様性保全活動には、人間活動や開発により減少した希少種の保護や、里地里山など生業としての人間活動が縮小することによってもたらされた二次的自然環境の保全、そして人間により持ち込まれた外来種などの根絶・管理活動など、幅広い活動が該当し、それらの活動自体は社会的に意義のある善行であると捉えられている。

また、2010年3月16日に閣議決定された『生物多様性保全戦略2010』によれば、COP10を契機として日本は国内施策の充実・強化を図るべく構想しており、その内の1つのポイントとして、「地方公共団体、企業、NGO、市民など地域の多様な主体が地域の特性に応じた生物多様性保全の取組を促進するための仕組みの検討や、地域が主体となった生物多様性の保全・再生活動や『生物多様性地域戦略』など総合的な計画づくりを支援する。」と明記されており、NPOや市民などが生物多様性の保全に取り組むことが期待されている。従って、一般市民の余暇時間が生物多様性保全活動に回されていくことが予想される。先にも述べたとおり、このような活動自体は善行と見なされ、活動を行う市民自体にとっては賞賛されても非難される理由は見つからない。

ただ、レジャー論を扱っている身としては、「果たして生物多様性保全活動が余暇時間に行われるとはどういうことなのか」という点についてあえて着目し、考察を進めてみたい。そして、現代の生物多様性保全活動にみるレジャー論的課題を明らかにしてみたいと考えている。

### 2. 方法

本報告では、生物多様性保全活動が、人間の生活の中でどのような位置づけを持つのかについて、複数の切り口から考察を行いたい。

具体的には、NHK放送文化研究所『国民生活時間調査』の「行動の分類」、アリストテレスのレジャー論、内山節の労働哲学の3つの題材を採り上げて考察を行いたい。そして、上記の考察をとりまとめ、「空間」・「時間」・「思考」から見た生物多様性保全活動に残された課題を取り纏めていきたい。

### 3. 結果及び考察

#### (1) NHK『国民生活時間調査』の「行動の分類」への当てはめ

NHK放送文化研究所の『国民生活時間調査』とは、人々の一日の生活を時間の面からとらえ、それに沿った放送を行うための調査であるが、日本人の生活実態を明らかにする基本データとして用いられることが多い。この調査では国民の行動を4つの大分類、15の中分類、29の小分類に分けて把握している。

本報告では、この分類を用いて生物多様性保全活動がどこに当てはまるのかを考察する。

表-1 のとおり、生物多様性保全活動は本来、その実態が収入を目的とする場合でも奉仕活動でも、大分類「拘束行動」に当てはまると考えられる。そして、前者は中分類「仕事関連」・小分類「仕事」に、後者は中分類「社会参加」・小分類「社会参加」に分類されることとなる。

この結果を見ると、NHK の考え方に従えば、生物多様性保全活動は、原則論としては、レジャーを行うための時間である大分類「自由行動」には当てはまらないと結論づけざるをえない。あえて、生物多様性保全活動が該当することがあり得る分類を挙げてみると、大分類「拘束行動」の中の小分類「授業・学内の活動」「学校外の学習」と、大分類「自由行動」の中の小分類「会話・交際」「スポーツ」「行楽・散策」「趣味・娯楽・教養」が挙げられる。つまり、生物多様性保全活動を、つきあいやスポーツ、行楽、娯楽・教養などの側面として捉えた場合に初めてレジャーとして認識されることが分かる。

## (2) アリストテレスのレジャー論からみた生物多様性保全活動

続いて、アリストテレスのレジャー論（松田 1999 など）を礎に生物多様性保全活動を考えてみたい。

アリストテレスは、表-2 に示したように自由時間の過ごし方をアナパウシス、パイディア、スコレーの3タイプに分類している。

生物多様性保全活動をこの考え方に従って考察してみると、平日市街地で機械やコンピュータなどを相手に、達成感を感じにくい業務をこなすストレスの多い一般市民にとって、自然を相手に活動することは休息・休養・保養（アナパウシス）としての役割を十分果たすことが容易に想像可能であり、自分の意思で自然相手に活動することで気晴らし・娯楽（パイディア）的体験が得られることも想像に難くない。また、閑暇・感想（スコレー）、

表-1 生活時間の行動分類と「生物多様性保全活動」との関係

大分類	中分類	小分類	具体例
必需行動	睡眠	睡眠	30分以上連続した睡眠、仮眠、昼寝
	食事	食事	朝食、昼食、夕食、夜食、給食
	身のまわりの用事	身のまわりの用事	洗顔、トイレ、入浴、着替え、化粧、散髪
拘束行動	療養・静養	療養・静養	医者に行く、治療を受ける、入院、療養中
	仕事関連	仕事	何らかの収入を得る行動、準備、片付け、移動なども含む
		仕事のつきあい	上司・同僚・部下との仕事上のつきあい、送別会
	学業	授業・学内の活動	授業、朝礼、掃除、学校行事、部活動、クラブ活動
		学校外の学習	自宅や学習塾での学習、宿題
	家事	炊事・掃除・洗濯	食事の支度・後片付け、掃除、洗濯・アイロンがけ
		買い物	食料品・衣料品・生活用品などの買い物
		子どもの世話	授乳、子どもの相手、勉強をみる、送り迎え
		家庭雑務	整理・片付け、銀行・役所に行く、病人や老人の介護
		通勤	自宅と職場・仕事場（田畑など）の往復
自由行動	通学	通学	自宅と学校の往復
	社会参加	社会参加	PTA、地域の行事、会合への参加、冠婚葬祭、奉仕活動
	会話・交際	会話・交際	家族・友人・知人・親戚とのつきあい、おしゃべり、電話、電子メール
	レジャー活動	スポーツ	体操、運動、各種スポーツ、ボール遊び
		行楽・散策	行楽地・整華街へ行く、街をぶらぶら歩く、散歩、釣り
		趣味・娯楽・教養	趣味・けいごごと・習いごと、鑑賞、観戦、遊び、ゲーム仕事以外のパソコン（インターネットは除く）
		趣味・娯楽・教養のインターネット	趣味・娯楽・遊びとしてのインターネット、ホームページ作成
		テレビ	BS、CS、CATVの視聴を含める
		ラジオ	
	マスメディア接触	新聞	朝刊・夕刊・業界紙・広報紙を読む
雑誌・漫画・本		週刊誌・月刊誌・マンガ・本・カタログなどを読む	
CD・MD・テープ		CD・MD・テープ・レコードなどラジオ以外で音楽を聞く	
ビデオ		ビデオ・ビデオディスク・DVDを見る、ビデオ録画は含めない	
休息	休息	休憩、おやつ、お茶、特に何もしていない状態	
その他	その他	上記のどれにもあてはまらない行動	
	不明	無記入	

「ハッチング」で示した項目は「生物多様性保全活動」に本来該当すると考えられる分類

「斜体」で示した項目は「生物多様性保全活動」が該当することがあり得る分類

表-2 アリストテレスによる自由時間の過ごし方の3タイプ

<b>アナパウシス(anapausis):</b> 休息・休養・保養 (rest /relaxation, recreation) それ自身が目的ではない。活動するための手段。
<b>パイディア(paidia):</b> 気晴らし・娯楽 (amusement, entertainment) anapausisの一形態。一生涯懸命のためにpaidiaを求めることは正しい。
<b>スコレー(schole):</b> 閑暇・観想 (leisure/school, contemplation, cultivation of mind) それ自身が目的であって、実利は期待しない。自身に固有の楽しみが存し、自足的、真理と自己理解の追求、知性に即した生き方。

つまり実利を期待しない自足的な活動で真理と自己理解の追求に基づく知性に即した生き方にも繋がると考えられる。

つまり、アリストテレスのレジャー論から生物多様性保全活動を考えた場合には、非常に幅の広いレジャー的思考要素が含まれていると結論づけられる。

### (3) 内山節の労働哲学から見た生物多様性保全活動

続いて、今度は生物多様性保全活動を労働論の切り口から考察してみた

表-3 内山節による「仕事」と「稼ぎ」の区別

<b>稼ぎ</b> :単にお金を手に入れること
<b>仕事</b> :自分にとって、社会にとって意味のある働き

い。本報告では、我が国の自然や森林活動に対して造詣が深く、多数の著書を公表している内山節の労働哲学(内山 1989 など)を素材に考察を行いたい。

内山は、自然を相手にする農山村の住民が労働の概念を大きく2種類に分けて認識していることを指摘している。その内容は、表-3に示したとおり、「稼ぎ」と「仕事」に分類される。区分の基準は、生活するためにお金を稼ぐために仕方なく行う労働か、無償であっても自分や社会にとって意味があると判断した場合に自主的に行う労働であるかの違いであるといえる。

元々田舎に住むと言うことは、「稼ぎ」の伴わない「仕事」が必然的に多くなるといえる。出稼ぎなどが典型例であるが、生物多様性保全活動の舞台となる農山村や原生地周辺の住民は、お金を手に入れる「稼ぎ」を行うために伝統的に都会へ出かけていった。そこから考えると、生物多様性保全活動は、「稼ぎ」に該当する自治体職員や専門職を除き、平素は都会で日常的に「稼ぎ」を行っている一般市民が「仕事」を行う舞台として機能していると指摘できよう。

## 4. まとめ

### - 「空間」・「時間」・「思考」から見た生物多様性保全活動に残された課題 -

以上、NHKの『国民生活時間調査』、アリストテレスのレジャー論、内山の労働哲学から生物多様性保全活動に関するレジャー論的位置づけについて考察を行った。

考察結果をまとめると、NHKの分類基準に従えば、生物多様性保全活動は本来、その実態が収入を目的とする場合でも奉仕活動でも、大分類「拘束行動」に位置づけられることが原則であるが、可能性としては「会話・交際」「スポーツ」「行楽・散策」「趣味・娯楽・教養」といった「自由行動」に該当しうることが明らかになった。

また、アリストテレスのレジャー概念に従えば、生物多様性保全活動はアナパウシス・パイディア・スコレーのすべてのレジャー的思考を含む活動であることが明らかになった。

最後に、内山の労働哲学に従えば、生物多様性保全活動は、労働の中でも、無償であっても自分や社会にとって意味があると判断した場合に自主的に行う「仕事」に当てはまると整理できた。

以上から総合的に判断すると、生物多様性保全活動がワークかレジャーかと問いかけた場合には、やはり根源的には「拘束時間」で「仕事」としての性格を持つワークに分類すべきと結論づけられよう。しかしながら、そのワークは自主的に行う欲求を掻き立てるほど、レジャー的な思考要素を同時に含んでいると結論づけられる。

本報告では、このように生物多様性保全活動を基本的にワークとして位置づけた。そ

れではこのように位置づけられたことで、何か問題点が生じるのかという点について、ここではさらなる取り纏めを行いたい。

田中(2009)は、表-4に示したとおり、レジャー学とは、「オープンスペース」、「余暇」、「自然」のすべての次元

を対象として、与えられた「間」をより良くするという統合学問として捉えるべきであることを提唱している。

この考えを元に生物多様性保全活動の特性を改めて考えると、1～3次元の「空間次元」における「人為の届かない『間』」に関しては、里山空間を向上させる点で、プラスに働くと捉えられる。また、5次元以上の「思考次元」における「人為の届かない『間』」についても、人と自然との関わりを探求する点でプラスの働きが期待できる。しかしながら4次元の「時間次元」における「人為の届かない『間』」については、「稼ぎ」にせよ「仕事」にせよ「拘束時間」として人々の余暇時間を減少させる可能性を持つ生物多様性保全活動は、必ずしもレジャー論的立場からのプラスをもたらさないと結論づけることができよう。

以上、生物多様性保全活動という、一般的には善行であり、その活動の実践についてあえて批判を受けることが少ない活動を俎上に、レジャー論的課題を探るべく考察を行った。その結果、このような善行であっても「時間次元」においては必ずしも、レジャー生活に向上をもたらすとは限らない可能性を指摘することができた。

一般に現在我が国の人生は平均80年、70万時間程度と言われている。本来無限に広がる「空間」、「時間」、「思考」という各側面においても、個人にその問題を還元した場合には有限となり、特に「時間的側面」の制約が大きくなる。

従って、レジャーのための時間をより効果的に確保するためには、生物多様性保全活動のような善行であってもワークとレジャーとの時間的配分比を変更して余暇時間を原資にワークを増やし、レジャーを減らして対応するという考え方だけではなく、「稼ぎ」と「仕事」とのバランスを考えて、ワークの中で、両者の時間的比率を調整する努力が今後より重要になると考えられた。

【参考文献】

松田義幸(1999)Work & Leisure について、実践女子大学生生活科学部紀要 36、p109-114  
 NHK 放送文化研究所(2005)2005年国民生活時間調査報告書、NHK 放送文化研究所、p4  
 田中伸彦(2009)「オープンスペース」「余暇」「自然」そしてレジャー学のあり方、レジャー・レクリエーション研究 63、p58-59  
 内山節(1989)自然・労働・協同社会の理論—新しい関係論をめざして、農山漁村文化協会、p 10-27

表-4 オープンスペース・余暇・自然の定義と対応する主要な学問領域

用語	次元数	定義	各々の「間」を扱う主要な学問領域	統合的研究領域
オープンスペース	1～3次元 (空間次元) 	空間における人為の届かない『間』	造園学など	レジャー学
余暇	4次元 (時間次元) 	時間における人為の届かない『間』	余暇学など	
自然	5次元以上 (思考次元) 	思考における人為の届かない『間』	哲学など	